

家庭教育通信

1年生になったら

平成30年5月11日発行

遊びとお勉強

年長になったばかりというのに、お友達のAちゃんは絵本をもうすでにすらすらと読んでいるらしい。Bちゃんは足し算も習っているとか。それに比べてうちの子は……。お勉強の準備をしなきゃ。

来年4月には小学校に入学。学校公開や説明会などで小学校に行く機会が増えると、「わが子はある所で、みんなと一緒にやっていけるのかな」と不安な気持ちがわいてきます。確かに、自分の名前が読めて書けること、時間を守って学校に来ることなどは標準化されています。

そのようななか、親に「遊んでいてばかりいないで、勉強しなさい」と言われた記憶がよみがえり、テキストを買い与え、鉛筆を握らせる……こともあるでしょう。

しかし、こどもたちは保育園、幼稚園で、友達や先生と過ごす中で、すでに、「遊び」を通して「勉強」「学習」をしているのです。

「遊び」は「学び」

工作やおままごと、砂・泥んこ遊びなどは数や量の感覚を育てます。また、お母さんやお友達に「お手紙を書きたい!」という意欲は文字や数への関心を引き出します。

みんなと遊ぶ中で、ルールを決めたり、工夫したりすること。勝つことの喜び、負けたときの気持ちのもちなおし、次はこうしようと思う意欲。これらは、目標に向かって努力することや自分の気持ちを調整しながら人と関わる力を育みます。おにごっこやかけっこなど、おもしろさや悔しさを体感しながら動くことは体を動かす基礎となる「脳」を育てます。

このように、自分の「やりたい」を大切にしながら十分に遊んでいることが、将来の学びの基礎になるのです。

家でテキストなどを大急ぎで購入し、読み書き計算を入学前に無理強いして、「お勉強」させることに大きな意味はありません。

それよりも、「今日はね、こんなことがあったんだよ」というこどもの声に耳を傾けましょう。こどもの「安心」を育むことが、入学後の先生やお友達との関係を安定させ、こどもの学ぶ意欲を高めていくことにつながります。

地域教育課社会教育担当
TEL (3647) 9676

家庭教育通信

1年生になったら

平成30年9月11日発行

給食

みんなと食べる給食はとってもおいしい。苦手なお肉や野菜も何とか食べられる。でも、どうしてもトマトが食べられない。小学校は全部食べないとだめなのでしょうか。

学校での生活のなかでも、給食は一人ひとりの違いがとてもよく表れる活動です。保護者はもちろん、幼稚園や保育園の先生方も、こどもの好き嫌いをなんとかしようと、いろいろと工夫しているかと思います。

そのなかで、こどもは自分の「やってみたい！」から様々なことにチャレンジして成長していきます。好き嫌いがあっても、そこには一人ひとりのこどもの育ちがあります。大人から見ればまだまだ未熟かもしれませんが、自分でやってみようとチャレンジしていく子どもの気持ちと姿に目を向けてほしいと思います。

みんな違っていい

こどもの好き嫌いは、命を守るための理に適った行動でもあります。自然界では本来的に、酸っぱさは腐ったものの味、苦さは毒に伴う味です。酸味のあるトマトや苦みのあるピーマンなど、こどもの苦手な味には理由があります。今は何でも食べられるようになった大人も、成長する過程でさまざまな味覚を楽しめるようになってきたのではないのでしょうか。

また、腸内環境の状態も一人ひとり異なっています。肉を消化しやすい人や、困難な人、野菜を栄養として消化・吸収しやすい人など、食の好みには見えない理由があることも少なくないようです。

みんなと食べる給食がとってもおいしいことは、何より大切な心の栄養をとることにつながります。家族で食卓を囲む団らんや給食が苦痛の時間になってしまえば、食べようとする意欲も失ってしまうでしょう。栄養を取り込む消化器系も、そのようなストレス下では本来の働きができません。好きな大人や友達がおいしそうに食べていることで、「自分も食べてみようかな」という意欲が引き出されることもよくあることです。

こどもの時には、思わず食べたくなくなってしまう雰囲気づくりが大切です

地域教育課社会教育担当
TEL (3647) 9676

家庭教育通信

1年生になったら

平成 30 年 1 1 月 1 1 日発行

放課後

保育園のお迎えが6時から7時のわが子。小学生になったら幼稚園出身の子とも一緒にいる。学校が終わったら、友達ときっずクラブでと思っているけれど、どんな感じなのかしら。行きたくないって言ってきたらどうしよう。

小学校では新しい先生や友達を始めとして、これまでとは大きく環境が変わりますが、そこで戸惑いが生じるのはむしろ健全なことです。こどもの小さな葛藤や驚きに、ぜひ耳を傾けて寄り添ってあげてほしいと思います。

放課後のきっずクラブでは、仲良くなった友達と様々な活動を自発的に楽しんだり、上級生のお兄さんやお姉さんと一緒に遊んだり、宿題をやったりしている姿が見かけられます。

こどもの育ちと安心感

このような新しい環境に慣れて楽しい生活をスタートする際に、最も大きな影響を与えるものは「人間関係」です。小学校でもきっずクラブでも、新しい先生や友達と「良好な関係」をつくっていくことが、毎日の生活を楽しく生き生きとしたものにしていきます。

良好な人間関係をつくるために大切なのは、「自分は受け入れてもらえている」、「自分はかけがえのない大切な存在なんだ」、という感覚に裏付けられた、こどもの中の「安心感」です。

保護者がこどもにとって自分を受け止めてもらえる安全基地になっていると、離れていてもこどもは安心感をもって友達との関係性を深めていったり、遊びでも勉強でも、できなかったことにチャレンジして、自分を成長させていくことができるようになります。生活の変化への適応や自立のためには、こどものなかにしっかりと「安心感」が育っていることが大切なのです。

幼児期にはこどもが求める抱っこやハグはもちろんですが、こどもにしっかりと気持ちを向けて、日々の会話のなかで今日何があったのか、こどもは何を望んでいるのかといったことに共感して思いを寄せることで、学びと自立に必要な「安心感」を育んでいただきたいと思います。

地域教育課社会教育担当

TEL (3647) 9676

家庭教育通信

1年生になったら

平成31年1月11日発行

「読む」喜び

絵本の読み聞かせが大好きなわが子。このまま本好きでいてほしいけど、スーパーの入口でママの買い物を待っている小学生は、みんなスマホやゲームで遊んでいる。あぁなってはほしくないけど。

どうしてこどもは絵本の読み聞かせが好きなのでしょうか。「絵がきれいだから」、「物語がおもしろいから」、「親の声を聞くと安心するから」。

答えはこどもの数だけありますが、その根底にあるのは、親が絵本を通して「こどもに心に向けている」ということです。例えば、親がスマホやテレビを見ながらうわの空で読み聞かせても、なかなかこどもは絵本の世界に入り込めないでしょう。こどもが安心できる拠り所になるべき親が、「心ここに在らず」の状態で向き合うと、こどもは不安な気持ちになるものです。

このように読み聞かせの喜びは、単に読んでもらえる喜びだけではなく、大好きな親と「一緒に読む」喜びなのです。ぜひ、小学校に入る前、まだ自分では読めない時期の「一緒に読む」喜びを大切にしてください。

「一緒に読む」ということ

家庭でも保育園でも、大人のひざの上に乗って本を読むことは、こどもの心を満たしていきます。一対一の個別の関わり合いは、自分しかかけがえのない大切な存在であることを、こどもに伝えることになります。ぜひ、こどもと一緒に絵本コーナーがある書店や図書館に足を運んでみてください。そこには様々なメッセージを持った魅力的な本が置いてあります。こどもたちはついつい手に取って見てしまうはずです。そして、「読んで」とお願いしてきたら、ぜひ一緒に読んであげてください。

こどもは絵本を読むことを好きになれば、いずれ読み書きに興味を持ち、絵本から図鑑や児童書へ関心を広げ、学校や図書室で本を手にする機会も増えるものです。こどもの「読むことは楽しい」という心情や、「読んでみたい!」という意欲を大切に、親子で「一緒に読む」ことを楽しんでほしいと思います。

地域教育課社会教育担当

TEL (3647) 9676

家庭教育通信

1年生になったら

平成31年3月11日発行

「小学校」に行くということ

春からは決められた時間で動く学校へ…。わが子に本当にそんなことができるのだろうか。名前は書けるけど、まだ字が読めない。隣の〇〇ちゃんはまだ足し算ができるらしいのに、わが子はまったく興味がないみたい。

子を思う親の心配は当然のことですが、心配するがゆえにいろいろと口出ししてしまうと、こどもに「不安感」を与えることにもつながります。「なるようになる」くらいの大きな気持ちで向き合えるとこどもにとってちょうど良いのかもしれません。

幼稚園や保育所では、直接的な教科教育は行わないことになっており、生活や遊びを通して、こどもの読み書き計算への興味や関心、意欲を育てようとしています。当然それは個人差が大きくなりやすいところでもあるので、小学校ではどの子も標準的な学力を身に付けられるようにカリキュラムが組まれています。

こどもの中に新しいことを学びたいという気持ちや意欲が育っていれば、入学時の学習の遅れはあまり問題にはなりません。この時期のできる・できないは、「どんぐりの背比べ」で、じきに追いついてしまうことがほとんどです。

こどもが読み書き計算を学ぶうえでは、就学前の心と身体の「発達」が土台になります。思い切り身体を使って動いたり、友達とたくさん遊んだり、「やりたい遊び」に没頭する経験が、豊かな発達を支えています。また、さまざまな遊びの中で、文字や数字に興味を持つ機会はやってきます。

発達と学習を支える「安心感」

小学校に入学した当初はそれまで当たり前だった生活システムが変化するため、親もこどもも戸惑うことは当然です。でも、こどもたちは自分なりに変化に向き合いながら成長していきます。

こどもがのびのびと学んでいくためには心と身体の発達がとても大切です。そして、その発達を支えるのは「自分は愛されている」という「安心感」です。こどもの安心感を育むことができるのは親の愛情です。こどもの気持ちにしっかりと寄り添って、小学校入学までの日々を大切に過ごしてほしいと思います。

地域教育課社会教育担当

TEL (3647) 9676

家庭教育通信

1年生になったら

令和元年5月11日発行

来年は小学生

年長になると「来年は小学生、どんな準備をしたらいいの」という会話が自然と増えてくると思います。今のうちにできることをやっておきたい親心、でも何をすれば？・・・と不安が増す時期です。

そこで、小学校に入学するまでにじっくりゆっくり家庭で育てておきたい「根っこの力」について今回はお話ししましょう。

①やる気

今、我が子が何かに夢中になっている姿によく目を向けてみてください。

好きなことに没頭するなかで、こどもはそれぞれ個性的に考えて工夫する力を自らの中に伸ばしていきます。そこを見とって、さりげなく、「ほめる」ことが大切です。

「すごいね、そんなこと考えたんだ!」。見守っている親の愛を感じることが、こどもの安心感と「やる気」を育てます。これは学校での勉強場面に必ず活きる「根っこの力」です。

②聴く・訊く力

例えば絵本の読み聞かせにじっと耳をすます「聴く力」、あるいは、自分にわからないことは「教えて!」と言える小さな勇気「訊く(たずねる)力」、このような「きく力」は、小学校での学習にとっても役立ちます。よくきいて自ら考える習慣は、将来の「思考力」につながります。

小学校の勉強を先取りすることは「ぼく知ってるもん!」という慢心となって「きく力」を弱めかねません。

就学前に大切なことは、相手の話に耳を傾け、わからないことは素直に質問する対等なコミュニケーションの積み重ねです。絵本の読み聞かせは字が読めるようになってからでもお勧めですよ。

③思いやりの心

例えば隣の子が消しゴムを忘れて困っていたらさりげなく貸す子になってほしいと親は思います。

「1年生になったら何でも自分でやらないと!」と張り切りすぎず、困ったら誰かに頼っていいし、また頼られてもいいのです。助け合って声かけ合っていこう!の心をもつことが大切です。

いかがでしたか。今回の3つの力を意識することで、親も子も「保幼小接続期」を、楽しく期待を持って乗り越えられると思います。

地域教育課社会教育担当

TEL(3647)9676

家庭教育通信

1年生になったら

令和元年7月11日発行

「まねびとまなび」 あらためて語る遊びの大切さ

今回は「人がまなぶ」という営みの原点を考えてみましょう。

そもそも「まなぶ（学ぶ）」の語源は「まねる（真似る）」だと言われます。職人が達人の技を見て真似を繰り返して身につけていくように、こどもたちも大人の言動をまねて、大切なことを学んでいきます。

例えば、敬語。

ある親御さんは、保育園の先生から息子（5歳）のことで、「〇〇君はみんなの前に出てお話しする時に、丁寧ことばが使える子ですね」と褒められたそうです。息子さんは、「おやつを作ってくださいる給食室の〇〇さんが・・・」とお話ししたらしいです。

これはたぶん親がふだん話す言葉をまねしたのでしょう。5歳でも場に応じた敬語（丁寧語）が使えるという実例です。幼児から学童期にかけてこどもは爆発的に言葉を覚えます。周りの大人が日常どんな場面でどういう言葉を使っているか、見て聞いて学んでいます。私達大人は次世代に、良い日本語を伝えていきたいものですね。

次は、「雨降りの日に水たまりをじっと見ていた〇〇ちゃん」のエピソードです。

〇〇ちゃん（6歳）は雨の日、水のおもてにきれいな輪が次々に広がっているのに気づきました。何だろう？雨が落ちるとできるのかな。近くにあった小石を水面に落としてみました。できました！輪が静かに広がり、重なり合って消えたりする。不思議だなあ！

このとき夢中で雨のしずくから生まれる波紋で遊んでいた〇〇ちゃんは、中学生になって理科で「音波」を学んだ時に「あっあれと似てる！」と気づき、体験と知識が自分のなかでつながる瞬間の喜びを感じたそうです。小さい時の何気ない遊びのなかに隠れていた科学の芽。水たまりにしゃがんでいた自分を、せき立てずに見守ってくれた親への感謝を〇〇さんは述べていました。

幼いころの遊びのなかには、人や物事に関する真理が含まれていて、私達は知らず知らずそれを体験として学んでいるのでしょう。五感を通した体験（遊び）の重要性がわかりますね。

地域教育課社会教育担当

TEL（3647）9676

家庭教育通信

1年生になったら

令和2年1月11日発行

「自ら学ぶ子を育てるために」親のかかわり方のポイント

小学生になったら自分から進んで勉強する子になってほしいと、親はみな思います。今回は、そんな願いを支える「親のかかわり方のポイント」を考えてみましょう。

やる気を育てる＝ほめる

自ら学ぶという行動を起こすのは、こどもの内面に「やってみようかな?」「できるようになりたい!」などの「意欲」が湧くことが出発点です。

見えない、そのエネルギーが、やる気の源（みなもと）です。

人間は誰しも、けなされれば、やる気は萎みますね。小さな意欲の芽こそ、大事にしましょう。

そのためには、機を見て「ほめる」ことが大切です。

「それ、おもしろそうだね」「すごいことやってるね」「かっこいい」「さすが」等、大人として、ほめ言葉のバラエティを蓄えたいものです。

これは、お子さんの「今」をよく見つめる姿勢にも、つながります。

失敗は成功の基＝励ます

こどもが何かうまくできなかった時、失敗した時「だから言ったでしょ」や「どうしてわからないの?」は禁句です。

親は、そう言いたい気持ちをぐっと押さえて深呼吸、「失敗は成功の基」と、自分の心に言い聞かせましょう。

そして、次はきつとうまくいくよと励ますことによって、こどものがっかり感を救いましょう。

これは、出来事を前向きにとらえて自ら立ち直る力（自己肯定感・回復力）を育てることにも、つながります。

新しい方向を示す＝広げる

ここまでの「ほめる、励ます」は意識すればできますが、「広げる」は意外と難しいものです。

こどもが学ぶ姿をよく見て、ちょっとした新鮮なヒントを繰り出す「水先案内人」のような親の存在は、こどもにとって素晴らしい人生のお手本となるでしょう。

自ら学ぶという旅に踏み出すこどもに対して、おもしろくて不思議な未知の世界への手がかりを示し、学ぶ営みに希望を灯す大人でありたいものですね。

地域教育課社会教育担当

TEL (3647) 9676

家庭教育通信

1年生になったら

令和2年3月11日発行

いよいよ来月から小学生

思えば、生まれたときの身長の倍以上になり、抱っこするには重い体重になり、あっという間に幼児期からの卒業が近づいてきました。

学童期と言われる小学生時代、心身ともに大きく変化する6年間はやってきます。これから少しずつ親離れが進み、親の務めも変化していくことでしょう。

いよいよ小学生の親となる皆さんに、今回は、とっておきの心得「こどもへのまなざしは三つの心持ちを理解して」をお届けします。

自由への心持ち

こどもはだんだん自分の世界をもつようになります。自分で決めたことなら長い時間の集中もきくし、失敗してもやり直してがんばります。

判断力は未熟とはいえ、感情は豊かになる時期、頭ごなしに「ああしなさい、こうしなさい」では通じません。

こどもは、成長のプロセスで、自力で思考し行動する自由を欲していくのです。その尊い心持ちをつぶさないように育てたいものですね。

力への心持ち

強弱に個人差はありますが、一番になりたいとか勝ちたい、うまくなりたいという心持ちは、よい意味の競争心であり活動エネルギーです。

他者と比較してとやかく言うのは間違いのもとですが、信頼する親に、力を認めてもらいたい心持ちは、どの子もきっと密かに持つもの。上手にほめて、力（自分の存在）に自信を育みたいものです。

楽しむ心持ち

小学校で勉強がんばろうと張り切るこどもたちのキラキラした瞳ほどうれしいものはありません。でも「遊びが学び」であった幼児期の学びの原点（おもしろい、不思議、わくわくするあそび心）を忘れないようにしたいですね。石ころ一個、水の流れひとすじでも遊べる「楽しみ見つけ」の心持ちこそ、科学的思考のみなもととなるのです。

これからも一緒にたくさん遊んでほしいと思います。

以上のようなこども理解に支えられた「親のまなざし」。これがあれば、きっと学童期の子育てうまくいきますよ。

皆様のご家庭のご多幸を祈りつつ、今年度のコラムを終わります。

地域教育課社会教育担当

TEL (3647) 9676

家庭教育通信

乳幼児期のこどもたち

令和6年10月1日発行

こどもの育ちで大切にしたいこと① からだの土台作り

子育て中に「こんなとき、どうしたらいいの?」「これでいいのかな?」と困った時、インターネットでさっと調べられる便利な世の中になりました。一方で「情報があふれすぎて何を選べばいいかわからない」という声もよく耳にします。

時代が変化しても、子育てで大切にしたいポイントは変わりません。特に乳幼児期は「からだところの土台作り」の時期といえるでしょう。土台作りは日常生活をていねいに行うことで可能になります。

今回は、「からだの土台作り」に役立つ生活の基本「くう・ねる・あそぶ」についてお話します。

「くう」・・・食べること

毎日の食事を通して、こどもの元気なからだや安定した生活リズムが作られます。

「空腹が満たされるのは心地いいな」「いろんな味や舌触りがあるんだな」という経験を通して、「食べることって楽しいな」と思う心が育ちます。食欲や量は個人差がありますが、こどものペースを尊重しながら「一緒に食べるって楽しいね」という気持ちを大切に育てていきましょう。

「ねる」・・・眠ること、休むこと

人は眠っている間に、体や脳を休めて疲れをとり、元気に活動するためのパワーをたくわえます。赤ちゃんの頃は短い睡眠サイクルですが、成長するにつれ「昼は活動し、夜はぐっすり眠る」というリズムが安定してきます。こどもは大人に比べ、たっぷり睡眠をとることが大切です。昼間にしっかり活動することが、よい睡眠につながります。

「あそぶ」・・・遊ぶこと、活動すること

こどもが好きな遊びをじゅうぶん行い、大人も適度に関わりながら、経験を広げてあげましょう。近所のお散歩、雨や風など自然を感じることに、虫や花を見つけること、水あそびや砂あそび、かんたんなお手伝いなど、身近な生活のあらゆる行動がこどもにとっては楽しい遊びになります。

お子さんの「くう・ねる・あそぶ」は今どんな状態かな?とふりかえって、生活を整えるヒントにしてみてくださいね。

地域教育課社会教育担当
TEL (3647) 9676

家庭教育通信

乳幼児期のこどもたち

令和6年11月1日発行

こどもの育ちで大切にしたいこと② こころの土台作り

今回は、こどもの「こころの土台作り」についてお話しします。

「木が成長する姿」を想像してみてください。生まれたばかりの芽は、豊かな大地に支えられ、あたたかな太陽と適度な水を与えられることで、地中にぐんぐん根をのばし、頑丈な幹をもつ木に育ちます。

栄養をたっぷり吸収できる「根っこ」とたくましい「幹」からなる土台がしっかり育っていれば、しなやかに枝を伸ばし、葉をしげらせ、豊かな実がなるでしょう。多少の大風や寒さにも耐えることができるでしょう。

こどもの姿を木にたとえると、「大地・太陽・水」にあたるのがまわりの人々の関わりで、それによって作られるのが「こころの土台」＝「基本的信頼」です。

基本的信頼

「安心・安全」・・・まわりに自分を傷つける人やものはなく、安心してすごせる。

「守られている」・・・世話してもらえる。助けてもらえる。なぐさめてもらえる。はげましてもらえる。

「大切にされている」・・・自分はまわりの人に大切にしてもらえ、尊重してもらえる。そのことを言葉や態度でじゅうぶんに示してもらえる。

こうして人は様々な出会い・経験・困難からよいものを学び取り、好奇心をもってチャレンジし、自分らしい実りをつくっていくのだと思います。

「基本的信頼」は大人にも大切です。自分自身がじゅうぶんにこの感覚をもっていないと、人に与えるのが難しいことがあります。また、関わりが難しいお子さんの場合、「うまく接することができない」と、大人が自分を責めてしまうこともあります。

子育てで難しさを感じる時は、やさしい気持ちで自分自身にこころを向けてみてください。信頼できる身近な人に話すのもいいですね。地域の子育てひろば、子ども家庭支援センター、保健相談所などでもお話をうかがうことができます。

子育てはたくさんの人の関わりがあって成り立ちます。まわりの助けを借りながら、自分らしい子育ての形を作っていくくださいね。

地域教育課社会教育担当
TEL (3647) 9676